

[十周年企画]

清涼院流水

インタビュー

in 禁忌 on WebAns.

大説 文SHOW
—大切な自分紹介による

You may not say "Die!". J o k e r
夢の世代の浄化—

More Quiz (目次)

I T'S SHOW	TIME ! 紹介 時間です SHOW 介
N I P SHOW	Novel You gain a Kid! 述べるは有限な軌道
S U N SHOW	大説 サークル 大切な始まりと輪？
I O N SHOW	10年 You can act! 自由念の勇敢な苦闘
G O D SHOW	ぶらんでいっしゅ 将 来 不乱です SHOW 来
付 録 W H O R O C K	夢幻大説 無限大SETリスト

IT, S SHOW T I M E 時間ですSHOW介

一九九六年に筑波大学ミステリー研究会が設立されてから二〇〇六年でちょうど十周年を迎えました。

また、ミス研設立十周年だけでなく、一九九七年から毎年二冊発行し続けてきた「Ans.」も二〇〇六年秋の発行で20号を迎えることになり、二〇〇六年はミス研にとって記念すべき区切りの年であると言つていいでしょう。

そこで、設立十周年の特別企画としてこれまで筑波大学ミステリー研究会では、ミス研が設立したのと同じ年——一九九六年にデビューしたミステリ作家へのインタビューを行つてきました。

「Ans.」19号に掲載の貴志祐介さん、20号に同時掲載の森博嗣さんに続く一九九六年デビューのミステリ作家インタビュー第三弾は清涼院流水さんです。

一年の間に千二百個の密室で千二百人が殺されるといふ『コズミック』で第二回メフィスト賞を受賞。一九九六年九月五日に衝撃のデビューを果たしてから早くも十年。

ミステリーだけに限らず、いろいろなジャンルで最先端を走り続けている清涼院流水さんに、大説ができあがるまで、現在の状況、そしてこれからの十年について伺いました。

二〇〇六年の夏休みが始まったばかりの七月初め、JDC本部ビルにほど近い京都某所にて繰り広げられた清涼院流水さんのSHOW劇的で大説なお華詩の数々にインタビューのRとSは無事、インタビューを成功させることができるのか？

それではただ今より“清涼院流水in 禁忌”、SHOW TIMEの始まりです！

清涼院 流水

(せいらりょういん りゅうすい)

大作家。

一九七四年八月九日、兵庫県生まれ。獅子座。王(○)型。

京都大学経済学部在学中の一九九六年に第二回メフィスト賞を『コズミック 世紀末探偵神話』で受賞しデビュー。応募時のタイトルは『千二百年密室伝説』だった。

作品は他に『ジョーカー』、『カーニバル』『彩紋家事件』のJDCシリーズ、現実と同時進行し、西暦二〇〇〇年の一年間を描いたトップランシリーズなどがある。

また、二〇〇一年一月一日付けで大学に退学届けを提出し、“二十一世紀最初の京大中退者”となる。

最近では森博嗣のブログ「MORI LOG ACADEMY」で非常勤講師も務めた。

清涼院 それもいろいろあると思うんです。僕がだいたい昔から好きだった探偵は書き方が巧いと思うので、特定出来ないんですよ。だから読者に人気のある様な探偵は、高い技術に支えられているので、だいたい好きです。僕も昔から好きですし、今書き手として読んでも高い技術力を感じて凄いい好きになれますし。

——— では次の質問に移りますが、小説家……大作家になる前はゲームプログラマーを目指していらしたんですよね。ゲームに関しては、まだ手がけていらつしやらないので、いわゆる読者の視線なんですよね？

清涼院 はい。そうですね。——— そういう目で見ると……。

清涼院 好きな奴ですか？ 最近ではないんですが、近年ハマったのにワリオシリーズがあるんですよ。——— はい。

——— 「まわる」とかですか。
清涼院 そうですね。『メイドインワリオ』と『まわるメイドインワリオ』『さわるメイドインワリオ』って出てまして。

——— (S) アドバンスの奴ですね。
清涼院 あれにはハマりましたね。本当にゲーム好きとしてミーハーに好きになった最近の収穫でした。

——— それではDSとかPSP(注3)とか、そちらの方も？

清涼院 PSPはやってないですね。DSは僕、カルチャーショックだったんです。プレイする前にどうしてタッチペンを付けるんだ、と思ってセンスを疑ってたんですけど、やってみたら面白かったんですよ。さらに今度任天堂がWiiを出すじゃないですか。あれはコントローラーが特殊で面白そうな感じですよ。

——— スンチャク型とか。
清涼院 DSのタッチペンはかなり常識を覆してくれましたし、僕はそういう常識を覆してくれるのが好きなんです。最近のでは、ソフトならワ

リオですし、DSというハードに衝撃を受けました。だからWiiには期待してしまいますよ。

——— でしたら、DSのミステリーゲームもやられてるんでしょうか？

清涼院 いや、やらないですね。——— あ、そうなんですか。

清涼院 やつても楽しめないのでミステリーゲームはやらないんですよ。高校くらいまでパソコンゲームをよくしてたんですけど、当時はパソコンゲームでミステリーゲームがたくさん出たんですよ。そういうのは当時好きだったんですけど、書き手に回ると、純粋にゲームのミステリーが楽しめなかつたんですよ。

——— DSのミステリーゲームは機能を活かした感じがありますね。
清涼院 あ、そうなんですか。それなら、やってみたらハマるかもしれせんね。

——— 例えばタッチペンでアルミ粉を振りかけて、マイクに息を吹きかけると、指紋が出てくる、みたいな感じですね。

清涼院 ああ、なるほど。それは確かに面白そうですね。

—— やっぱりゲームは映像美の追求よりは新しい楽しみ方みたいな感じですか。

清涼院 なんにしてもやっぱり、新しい楽しみ方は僕、好きですね。

—— それは流水さんの作品の中で仕掛けなりで現れますよね。

清涼院 そうですね。

—— では、次に漫画に移りたいと思います。漫画もたくさん読まれてますよね。子どもの頃は買いませんでしたか？

清涼院 はいはい。よく覚えてますね。それは何かのインタビューで喋りました？

—— エースの緊縛(注5)です。

清涼院 ああ、そんなとこまでチェックしてるんですか(笑)

—— あのインタビューは本屋で見かけて絶句しましたから。何してるんだろこの人、って。

清涼院 あれは、編集者のたつての希望でやったんですけど。

—— 今、ありますよ。(と言って鞆から取り出そうとするS)

清涼院 見なくて良いですよ(笑)

—— では、漫画もやはり本ということで、多少意識はしてしまうんでしょうか。

清涼院 漫画は今でもハマると全巻一気に読みますんですけど、手を出しにくくなりましたね。自分で発掘するっていうのが少なくなりました。だから、知り合いとか編集者とかに勧められて面白いとわかっているものを読むことが多いですね。昔は時間もありませんで、好きな漫画は雑誌で読んで、さらにコミックで読んで確認したりとかしていたんですけど、最近雑誌でチェックしている作品自体が少ないですし、いろいろ漫画を追いかけているとコミックスの新刊が出て、わけがわからなくなってしまうんですよ。この新刊買ったかな、買ってないかな、っていうのがありますよね。物忘れかもしれないんですけど。

—— はい(笑)

清涼院 そういふのがありまして、漫

画を読むとしたら、評価が定まっている作品がある程度巻が出たところまで買って一気に読みますからね。一気に読みがやっぱり僕にとつて今でも漫画の醍醐味です。一巻ずつ読んでいくのって疲れますよね。ちよつと盛り上がってきたところでブツ切りされて……。

—— そして続きが出るまでにまた何ヶ月か待たされて、ですからね。あ、漫画を描かれたことはあるんですか？

清涼院 昔は描いてましたよ。僕は絵はそんなに上手くなかったんですけど、中高生の時に描いていた漫画は異常な程ウケにウケていたんですよ。それでちよつと漫画に目覚めて、本腰を入れたんですけど、すると急にウケなくなりましたよ。自分でも上手くなってきたなと思ったら急に評価が落ちてしまったんですね。これは難しい世界だな、と思って漫画はそんなに深入りせずにやめたんですよ。技法とかに頼らずに無茶苦茶描いた時期は本当にウケていたので、今

思うとそういう縛られない面白さがあつたのかなと思うんですけどね。

—— はい。

清涼院 実は小説でも全く同じで、中高生の時に悪ノリで書いた作品が凄いうけていたんですよ。そこで本腰入れて真面目に書き出したら、急に評価が下がったんです。お前にこんな求めてない、とか言われまして。小説はその後も頑張ったんですけど、漫画はその時に無理だな、と思いましたね。

—— 小説は勿論のこと、漫画やゲームということで、幅の広い創作活動ですよ。

清涼院 やっぱ、創るのが好きなんですよね。

—— 他に創作と言えば……音楽とかはどうですか？

清涼院 昔、楽器を少しやっていたんですけど、そっちはちよつと苦い思い出があつて挫折したんですよ。

—— (S) 聴く方はどうですか？

清涼院 僕はカラオケが好き(注6)なので聴くのは大好きなんですよ。た

だ音楽にもものすごく詳しい人がいるじゃないですか。そういう人達に比べて全然ですね。だから音楽を聴くことについて何か誇れることがあるかと聞かれたら、自分より詳しい人はいっぱい知っているので何も言えないという感じですよ。

—— では話は変わりますが、兵庫出身で大学入学時に京都に來られて、そのまま京都にお住まいなんですよ。

清涼院 そうです。ずっと京都です。

—— それはやはり、京都は住み心地がいいからですか？

清涼院 いいですよ。京都には魔力があつて、ここに慣れてしまうと、よそに行けないっていうのがあるんですよ。昔から親しいイラストレータの方に「京都は長年住んでると抜けられなくなる」と言われましたし。一つ例を挙げると、碁盤の目になつて、住所が交差点の縦軸と横軸を言っただけで、タクシーに乗った時にどこにも行けるじゃないですか。そういう便利さに慣れてしまうと、東京や大

阪でタクシーに乗つても不便な感じがしますから。

—— ああ、そうなんですか。

清涼院 単に子供の時から京都が好きだったというのもあるんですよ。

—— 兵庫にお住まいの時から？

清涼院 はい。神社仏閣への憧れがあつて、京都に行ったことがない時から京都に住むって宣言してました。実際、京都に来て住んでみるとやっぱりいい所なので、きつと永住するでしょうね。

—— もう十年以上ですよ。

清涼院 そうですよ。もう十三、四年ですよ。

—— 京都に来て……大学に入られて、阪神大震災になるわけですね。

清涼院 ええ。僕が大学二年生の終わりですよ。二十歳の時で。

—— 確か、『エル』のノベルス版の後書きに書かれていますけど、

清涼院 よく覚えてますね。

—— いや、あれは(笑)

清涼院 よくチェックしてますよ。

—— 全部読んでますから。

清涼院 いや、全部読んでいても覚えてなかったりすると思うんですけど、よく覚えてるなあ、と。

—— まあ、そうですね(笑)えつと……話を戻すと、やっぱり『コスミック』にしろ『カーニバル』にしろ、あとは『とくまでやる』にしろ、被害者数の多さに繋がっていくのは震災の影響はあるんですね？

清涼院 やっぱりあるでしょうね。もともとそういうインフレが好きだったというのは週刊少年ジャンプが好きだった影響だと思っんです。

—— はい。

清涼院 だけど、決定的に意識させられたのは震災でしょうね。あの圧倒的な体験っていうのは人生観変わりますから。関西在住の高村薫さんなんかも「震災で全部書き方も変わった」と仰ってますし。

—— 「Ans.19」でインタビューを掲載した**貴志祐介**(注7)さんもそのあたりはかなり影響を受けていらっ

しやったようで。

清涼院 貴志さんも書かれていますし。

—— 震災に影響を受けてデビューした作家となると、96年デビューの貴志さんと流水さんと、翌年デビューした**弐健二**(注8)さんの三人になりますかね。

注1 プログ

インタビューを行うと何度か書いていたせいとか、清涼院氏には事前にチェックされていた模様。書いた身としては恥ずかしい限りである。

ちなみに個人的オールタイムベストは順に綾辻行人『霧越邸殺人事件』、中井英夫『虚無への供物』、清涼院流水『ジョーカー』。

注2 矢吹駆

あえて説明するまでもないが笠井潔が描くシリーズ探偵の名前。現象学的見地から事件を見つめ、「本質直観」によって謎を解く。

『バイバイ、エンジェル』『サマー・アポカリプス』『薔薇の女』『哲学者の密室』『オイディプス症候群』が刊行されており、現在はシリーズ第六作である『吸血鬼の精神分析』の連載が終了した。

—— 完結するかどうかは不明。

注4 DSとかPSP

任天堂が出した「Nintendo DS」(DS)とソニーが出した「Play Station Portable」(PSP)は最新携帯ゲーム機の二大巨頭である。

タッチペン、マイク入力、二つの画面とゲームの幅を広げていく機能を付けたDSに対し、PSPは音や映像の美しさで勝負をかけたのだが、その結果は……？

注5 緊縛

「エース特濃」という漫画雑誌の清涼院流水特集で掲載された“清涼院流水緊縛インタビュー”のこと。

某出版社の地下駐車場に清涼院氏が手枷・足枷を付けられ、監禁された状態でのインタビューだった。

注6 カラオケが好き

『トップラン』及び『トップランド』シリーズには清涼院氏がカラオケ好きである証拠が数多く載っているのぜひ参照のこと。

注7 貴志祐介

一九九六年、『13番目の人格―I SOLA―』で角川ホラー大賞佳作となりデビュー。翌年、『黒い家』で角川ホラー大賞を受賞。二〇〇四年には初の本格ミステリー小説『硝子のハンマー』で日本推理作家協会賞を受賞する。

デビュー作は阪神大震災の被災者の心のケアをするためにボランティアをしていた女性が多重人格の少女と出会う物語だった。

注8 弐健二

一九九七年、『未明の悪夢』で鮎川哲也賞を受賞しデビュー。その時は最終候補に柄刀一、氷川透、城平京がおり、第一回(芦辺拓、二階堂黎人、西澤保彦)と並んで激戦だったと言われている。

『未明の悪夢』は阪神大震災が起こった中で発生した連続猟奇殺人と大がかりな物理トリックを融合させた島田流奇想ミステリーである。

SUN SHOW

大説書き始めと輪？

サークル

——では背景に関してはこれくらいにして、次はデビュー前後……：京大ミス研時代からお聞きしたいと思えます。まず京大ミス研を辞められたきっかけというのは結局の所、それが合わなかったから、というのでいいでしょうか？

清涼院 そうですね。それに尽きません。一年生で入ってバリバリ創作していて、最初は先輩達が好意的に迎えてくれていたんですよ。それが、僕が短編ではなくて長編を書き出してから、どうも反応がおかしくなってきたんですね。僕は『ジョーカー』の原型を一年生の時に書いたんですけど、それが賛否両論を巻き起こしてしまっています。賛と言っても自分と同世代か、ちよつと上が褒めてくれる程度で、もつと上の世代になると、これは本格じゃない、つていう声が出始めたんです。そこから大論争ですよ。だから

僕、一年生の終わりにサークルを辞めるつて言ったんですけど、二年生になつたら編集長つていうサークルの代表をすることになっていたんです。

——編集長になるのはもう決まつてらつしやつたんですね。

清涼院 決まつてたんですよ。僕がやらないとその学年がやばそうだったんです。それで一回、先輩と和解決んですよ。「やつぱりお前、頼む」と言われて。それで、二年生になつたら、作品を書くにつれて「本格じゃない」つていう声がまた強まってきたんですよ。僕も解つていてやつてるんですよ。「確かに本格ではないけれど、僕なりに本格を取り入れて書いた作品のつもりです」と論争はしていたんですけど、「とにかくこれは本格ではない」という話になってきたんです。また二年生の一年間同じことを続けて、これはもうこれ以上やつても無駄だなと思つて辞めたんですよ。

——はい。

清涼院 それこそ先輩の綾辻行人（注9）さんにも相談したんです。綾辻さ

んは別に辞めてもいいじゃない、ミス研で発表することが全てではない、と言つてくれたんですよ。綾辻さんは一年生の時から応援してくれていたんですよ。綾辻さんによると、ミス研で発表することに必死になるんだつたら、どんどん応募した方が作家に近づくつて最初から言われていたんです。だから僕が辞める時も応援してくれていた感じで、とても心強かつたですね。

——初めに書かれていた短編とは、犯人当ての形式の奴ですか？

清涼院 はい。何本か書きました。

——「黒猫間の犯罪」ですね。

清涼院 よく覚えてますよね。

——それはちよつと京大に知り合いがいて噂を……。

清涼院 ミス研に入つて、「黒猫間の犯罪」という綾辻さんの作品をもじつた作品を書いたら異常に評判よかつたんですよ。僕にしては本格ティストが強かつたんですね。でも僕も本格ミステリにしようと思つたわけじゃなくて、犯人当てとして自分なりの拘り

を持つて書いたら、たまたま本格読者でもウケる作品になってくれたんですよ。綾辻さんも、原稿をお渡しした夜に飲み会に来て面白かったと言うくらい、反応がよかったです。それで自信を持って、どんどん書き始めたんですけど、二作目の時点でなんかこいつ本格への考え方が違うぞっていう風に。

—— 犯人当ての短編は今後、形を変えてとかは？

清涼院 全然考えてないですね。

—— では「木村間の犯罪×Ⅱ」だけが奇跡的に。

清涼院 そうですね。あれは、木村彰一が分裂するのがやりたかったんですよ。あの時は西澤保彦(注10)さんがSFミステリを次々出している時期だったので、『19ボックス』で「木村間の犯罪×Ⅱ」を書いたんですよ。それから、西澤さんも同じ月に『複製症候群』というクローン人間ものを出したんです。

—— 担当編集者も驚いたとか。

清涼院 そうでしたね。

—— それでは……長編に関しては『ジョーカー』の原型をミス研時代に書かれていた。

清涼院 はい。高校生の頃から長編は書いてたんですけど、それは全然ミステリじゃなかったですね。

—— はい、ファンタジーとか？

清涼院 そうです。ミステリ要素が入ったファンタジーでした。それに綾辻さんに高校時代はハマっていて、「館」シリーズ(注11)みたいな作品も書きかけてたんですけど、それは書き上げるまではいかなくて、冒頭を書いたくらいでしたね。ちゃんと長編ミステリーを書いたのは、大学一年の時から初めてですね。

—— やっぱり、執筆量が半端じゃないですよ。高校生の時も、大学に入ってからにしろ。

清涼院 そうですね。特に二十歳前後までは体力もあり余ってたので、書くに任せて書けたんです。自分では気にしているつもりだったんですが、当時はまだ技術的なことも気にしてなかったんですね。それで次々書くこ

とを最優先してたんです。なので書けたと思うんですけどね。

—— 『ユズミツク』はメフィスト賞に初めて応募されて、そのまま受賞されたんですよ？

清涼院 そうですね。

—— たまたま原稿募集の掲載されてある『メフィスト』を発見されたんですよ？

清涼院 はい。一応ミス研だったんで『メフィスト』も読んでたんですけど、たまたま身の回りが慌ただしくて買ってたかった号があったんですね。だけど僕がいつも遊びに行ってるコンビニはなぜか、小説雑誌が沢山置いてあるコンビニなんです。それでなぜか『メフィスト』が置いてあって、ぱらぱらと見てたんです。そうしたら、メフィスト賞の原稿募集がありまして、「これだ」と思ったんです。たまたま買い逃した号を、コンビニで偶然見つけたというのに凄く不思議な感じがしました。

—— 見つけなかったら、どういった方法でデビューしようと考えてお

られたんですか？

清涼院 賞を取ろうとは思ってました。実は『コズミック』の直前に、**角川ホラー大賞**(注12)に出すために作り込んだホラーを書いてたんですよ。これも不思議な体験なんですけど、『野生時代』か何かの雑誌でチェックしておいたホラー大賞の締切が八月末だったんですよ。それで締切に向けて予定を組んで、六月には実際に書き始めてたんですね。ただその後、もう一回要項をチェックしようと思って雑誌を見たら、締切が六月末って書いてたんです。八月末で絶対間違いないと僕は思ってたんですよ。どういうことだ、急に早まったのかとか思いました……実際はそんなわけじゃないですけどね。だから自分のとんでもない勘違いで、応募が急に不可能になったんですよ。それでその時期に、メフィスト賞の原稿募集を見たので、こつちにしようってことになったんです。

——— メフィスト賞応募前にそんなことがあったんですか。

清涼院 ちよつと裏話をする、そのホラー大賞の前に、実は新潮社から原稿書いてくれたというお話があったんですよ。この話はインタビューで話したことないんですけど。

——— 初耳ですね。

清涼院 どういうことかという、一回、京大のミス研で、**島田荘司**(注13)さんをイベントにお呼びしようということになって、その時、僕が編集長だったんです。それで気合いを入れて、どうしても島田さんをご招待したいので来て頂けませんかって手紙を書いたんですよ。だけど結局、島田さんはどうしても来られなくて、断られちゃったんです。でも島田さんが僕の手紙で妙に感動してくれたらしく、当時、僕の手紙を持ち歩いて、会う人会う人全員に見せてたらしいんですよ、こんな人がいるらしいって。

——— 島田さんに……羨ましい限りですね。

清涼院 それで当時、新潮社が日本推理サスペンス大賞を新潮ミステリー倶楽部賞としてリニューアルしたんで

すよ。その新潮ミステリー倶楽部賞をやる時に、島田さんが推薦して編集者の方から、僕に書いてくれませんかかって言ってきたんですね。その編集者の方からのお手紙には「原稿用紙の上限が千枚という前例のない賞ですから、パワフルな作品を書くというあなたに相応しいです」って書いてあったんですよ。その時既に『コズミック』の構想もあつたので書こうかな、とも思ってたんですけど、僕は生意気の盛りで、「僕の作品は千枚では足りません」って返事出して、断ったんですよ(笑)その時、『コズミック』が頭にあつて、でもホラー大賞に出そうとしたら、締切を間違つて出せなくて、メフィスト賞に応募しようっていう流れですね。そういう段階があつて、メフィスト賞に辿り着いたわけなんです。僕は同じ系列で捉えられるのが嫌で**先輩作家と同じ道**(注14)をできれば歩みたくなかったんですね。だから講談社ノベルスからは絶対に出したくなかったんですけど、いろんな経緯があつて、もうこころしかないな

ていう感じがしたんですよ。だからいろいろな偶然が重なったせいもあって、講談社ノベルスから出せと言われていく気がしたんですよね。それも後で考えると結果的に正しかったのかな、と思います。

注9 綾辻行人

一九八七年、島田荘司の推薦を受けて『十角館の殺人』でデビュー。新本格の魁となる「館」シリーズや「囁き」シリーズ、「殺人方程式」シリーズなどがあるが、本格とホラーのハイブリッド作品が多い。

筆者の思い入れが強く、語ると長くなるので、ここで終わります。

注10 「館」シリーズ

『十角館の殺人』に始まる綾辻行人のシリーズ作品。中村青司が設計したとされる館で事件が起こる、というのが基本設定。第八作である『びつくり館の殺人』のみミステリーランドの一冊として出版されたが他の作品は講談社ノベルスから出ている。

注11 西澤保彦

一九九五年、『解体諸因』でデビュー。瞬間移動やクローン人間など、SF設定の中で謎解きを描く作品が多い。

注12 角川ホラー大賞

角川書店が主催しているホラー作品の新人賞(つてそのまんまですね) 瀬名秀明や貴志祐介などが大賞を受賞しているが、石田衣良、戸梶桂太、高見広春など、最終候補に残った人からも話題作が出ている。

注13 島田荘司

一九八一年、『占星術殺人事件』でデビューした本格ミステリー界の巨人。主なシリーズに御手洗潔シリーズと吉敷竹史シリーズがあるが、共にとてつもない人気がある。

新人発掘にも意欲的で、綾辻行人に始まる講談社ノベルス系の新本格作家を数多くデビューさせた。

注14 先輩作家と同じ道

おそらく、京都大学ミス研出身である綾辻行人、法月綸太郎、我孫子武丸、麻耶雄嵩と同様、島田荘司推薦&講談社でデビューという道のこと。

ION SHOW

自由念の勇敢な苦闘

——では次に、デビューしてからの十年について聞きたいと思います。とりあえずシリーズごとに「JDC」と「トップラン」と「とくま」。それと大きくくりですが「木村彰一」シリーズという四つのシリーズがあると捉えていいですかね。

清涼院 だいたいそんな感じですかね。

——まず、JDCシリーズに関してですが、JDCという設定を最初に考えたとき、これからどうやっていこうとか、JDCの方向性みたいなのは考えていたんでしょうか？

清涼院 学生時代にJDC作品を書き始めた時に、漠然と構想が浮かんだんですね。その構想は今でも大筋では変わってないんですよ。最初に**大悲劇**(注15)を書くというのが浮かんだんですね。その路線は今でも大きくは外れてないので。

——まず四大悲劇ありきで？

清涼院 そうですね。書いている事件をできるだけ凄惨な事件にした上で、でも実は四分の一だったら凄いな、という発想が出てきたんです。

——(S) 四大悲劇という言葉がまずあつてから、事件を四つ考えたんですか？

清涼院 そうですね。

——非常に気になる四つ目については今後の予定のところでお聞きしますが、次は「トップラン・トップランド」シリーズに関してお聞きします。二ヶ月に一冊発行を一年間行い、全六巻で完結という形式ですね。そういう条件だったら、ああいう物語がいただけるとうと？

清涼院 それもありますし、JDCは、僕のやりたいことの一部分ではあるんですけど、全部ではないというのがあつたんですね。『トップラン』を書く前は、どうしてもJDCのイメージが99パーセントを占めてた感じなんです。でも、JDCが僕の全てじゃないんです、と言いたくて、『トップラ

ン』みたいにならつと変わったのををやってみたかったという面は大きいんですよ。

——やっぱり『トップラン』六冊の続編である「トップランド」シリーズ(注16)が企画の途中で終わってしまったのは、物語が終わってないという意見が？

清涼院 編集者はやりたがってたんですよ。でも、僕の所に届く身近な読者の感想として、作品として終わってないっていうのは毎回言われてたんです。毎回、僕にとっては作品として終わってると思ってるのに、絶対に終わってないって意見が出るんです。終わってないって言う人のこともわかるんですけど、僕にとっては終わってるんだというのを理解してほしいのに、どうしても理解してもらえない状況だったんです。それでこの形式でやるのはちよつと無理だな、と思ったんですよ。

——終わってないというより、とつともなく続きが気になる感じの終わりだったと思いますね。

清涼院 企画としても無理があつたかなと思うのは、思わせぶりに終わって、一年間待たせちゃうんですよね。

それは何か違うんじゃないかと思つたのもありますし、あとは僕が自分の中で安全な方向に流れようとしていた気がして、それに嫌悪感を覚えただんですよ。

—— はい。

清涼院 『トップラン』が僕の中では一番うまくいった作品なんですよ。それで、こういうのをずっとやりたいな、という気持ちがあつて、「トップランド」というシリーズを立ち上げたんですね。だけど、まだ二十代なのに、楽な方に流れようとしているのが自分でも気になつたんですよね。

—— 楽というのはやっぱり、定期的に刊行が決まっているという？

清涼院 そうですね。一年に一回出すというルールを作っちゃうと凄く安心感あるんですよ。毎年四月と十月に、このシリーズは必ず出して、残り新しい活動をしていくという枠を作っちゃうと、楽は楽なんですな。

も今にして思うと、そんなことやらない方が僕らしいんじゃないかと思つてます。だから今のところは今後、そういうのをやるつもりはないです。

—— 次は……「木村彰一」シリーズの中でも『エル』、『ユウ』に関しては、続きはしばらくない？

清涼院 それは分からないんですけどね。

—— それ以外の作品について言うと、木村彰一はちよくちよく出てきて、作品の重要な位置にいるという感じですよな。

清涼院 今ではあれ(『エル』『ユウ』)も、『トップラン』のために必要だったと思つてます。というのは、JDCを出した時に、僕を見るイメージがJDC的なもので固定されてしまつて、凄く危険だなと思つたんです。だから次に傾向が全然違う『19ボックス』という短編集を出したんですけど、見方は変わらなかつたんですな。だからもつと本腰を入れて変えなければいけないな、と思つて、がらつと変えた「木村彰一」シリーズを書いたんです

けど、それでも読者の見方は変わらなかつたんですよね。

—— 最初のイメージが強烈すぎたんでしょな。

清涼院 当時とにかく、「JDCの清涼院」という見方を変えたいと思つて、JDCとはがらつと変えた「木村彰一」シリーズを出したんですな。それはうまくいかなかつたんですが、その次の「トップラン」シリーズではうまくいったと思うんです。

—— じゃあ最近の作品……『Wドライブ』にしろ『秘密屋』にしろ、木村彰一は出てきて重要な役割を果たしますよね。それも……？

清涼院 僕、木村彰一が出る作品を書くのは転換期なんですよね。前に大作を書いて、読者にイメージを固定されそうな時に、木村彰一が出る作品を書いて、読者のイメージをがらつと変えようとする人が多いんですけれど、あんまり変わらないんですよね(笑)

—— 三冊で完結した「とくま」シリーズに関してですけど、一作目の

『とくまでやる』は一日一人自殺者が
出るので、かなり『ゴズミック』の設定
に近いですよ。そう考えると、『彩
紋家事件』の毎月同じ日に人が死ん
でいくっていうのも、やっぱりイメー
ジが近いというか、設定を借りてるよ
うな部分があると思うんです。それ
は、「とくま」シリーズから入った読
者があとで『ゴズミック』を読んだ時
に、いろいろ感じて欲しいという想い
からでしょうか？

清涼院 それはありますよ。『とくま
でやる』の方がマニアックではないの
で、読者に親しみやすいと思うん
です。だから「とくま」シリーズから入っ
た読者が、もつとデイープなものを読
みたくて、『ゴズミック』を読んだ時、
こういうのが読みたかったと思っても
らえると凄く嬉しいですね。

——— そういう理由で、いくつかの
作品では、似たような設定を使ってい
るわけですか？

清涼院 定期的にとというのは僕の本
質的な部分で、僕が好きな攻め方な
んです。作家というのは、いかにし

て他の作家と作家像を差別化してい
くか、だと思っんです。そこで他の人
がやらなくて僕が好きなことってい
う時に、一番浮かびやすいのが、数
を増やすとか、定期的にやるってい
うことなんですね。そういうのが僕の
好みだし、他の作家さんが減多にや
らないことなので、わざと多用して
るんですけどね。

——— あとシリーズ同士の設定の
重なり、例えば『とくまでやる』に出
てくる××(注17)とか、秘密屋は別
な作品を書くために出てきた設定だ
と思うんですけど、それはどの作品
も繋がっているっていうのをやりたく
て？

清涼院 シリーズごとに別々だけど、
裏では全部繋がっているというのが昔
は好きだったんですよ。読者として
好きだし、豪華で贅沢な感じもする
んですけど、作者としては違うん
ですよ。むしろ、繋がる方が安っぽい
んじゃないかと思うようになったん
です。新しいことに挑戦しても、最後
に裏で繋がってまますとか言うのと、結局

新しいことにならなかったりするん
ですね。

——— 新しいことをやるということ
なんですけど、読者が本を手にとっ
て初めて成り立つような新しい話や
仕掛けが多いのは、楽しんでほしい
という？

清涼院 それは今でも変わらないで
すね。僕自身も読者参加の仕掛けが
好きなんですけど、それを満たして
くれる本っていうのは、あんまりな
いんです。それも結局、他の作家さ
んがやらないから、という所に繋が
りますね。

——— では、ミス研の中にも流水大
説の定義についてわかってない人が
いると思うので、ここで改めて聞いて
おきたいと思います。大説というの
はやっぱり、小説が個人の物語であ
るのに対し、大説は世界の物語とい
う説明でいいんでしょうか？

清涼院 その説明もよく使っ
んですけど、僕が今までした説明の中
で一番わかりやすいのが、ルール違反
のない小説が大説だ、っていう定義なん

すね。例えば、人によつては小説で算用数字使うだけで許せない人もいますし、ルビなんてけしからんって人もいます。ましてやトーナメント表だの、心理テストが入つてくると、こんなのは小説じゃないと言う人もいます。そうですよ。そういう意見に対して、僕は小説なんですよ、って言うしかないんです。いろいろ考えてみるとやっぱり、ルール違反がないのが小説なんだと思いますね。

——でもその反面、大説にもルールがある気はするんですよ。いかにして読者に楽しんで頂くか、という基本があつて、その上で楽しませるためには何をしてもいいという感じではないですか？

清涼院 そういうことですね。読者に楽しんで頂くためなら、ルール違反はないのが、大説なんです。

——その結果として、例えば見た目に拘りつた**SHOW**(注18)なり、言葉遊美があるわけですね。

清涼院 ある時期から、文章の行末を揃えたりするのを**SHOW**と言つ

てますけど、どうしてそれをやるかというのと、他の作家がやらないからというのがあります。それに小説って、パッと見た時、そんなに印象の差はないんですね。でも行末が横揃つてたり、斜めになつてたりすると、パッと見でも、なんだこれは、つてなるじゃないですか。だから**SHOW**も、楽しませるって面はあるんですけど、他の人には絶対できないことなので、僕がやっているわけなんです。

——僕自身も小説を書いている時、たまに二、三行行末が並んだりするとつい並べたくなるんですよ。それで実際に並べるんですけど、ページくらいでやる気が失われるんですよ。だからあれだけの量の行末を並べられるのは凄いですよね。

清涼院 でも日本には昔からそういう文化があるんですよ。俳句とか短歌とか、文字数を決めて、その中でやりましょうというのがあるので、**SHOW**もその延長だと思えます。だから決して、おかしなことではないと僕は思ってるんですけどね。

——それが大説の定義ならば、流水さんにとってタブーというのは読者に楽しんでいただけない作品、というわけになるわけですよ。

清涼院 そうですね。でも、そう言つてしまうと、つつこんでくる人が多いと思うんです。楽しめないよつていう声が(笑) それは絶対好みで出てくると思いますがね。

——流水さん自身が読者を楽しませることを最優先にしないのはタブーというわけですね。あと、完全に流れを断ち切ってしまうんですけど、タブーついでに聞いておきます。最近ミス터리界限でも『ゴズミック』『ジョーカー』とかの話がほとんどで、出てきても『カーニバル』までくらいだと思つてますよ。それよりはもうちよつと最近の作品についても、ミス터리方面から、評価なり話題に上つて欲しいという思いが、僕自身あるんですよ。

清涼院 でも、それは僕自身に責任があつて、僕自身本格の評価と関係ないところでやつていこうと思つてい

るんですよ。最近はちょっと合わせてもいかなってという気持ちもあるんですけど、一時期は本当に本格サイドから論じられることとか、もうどうでもいいじゃないか、と思う時期が続いたんですよ。だから論じられないのは僕の責任もありますね。でも今後の作品に関して言うと、本格ファンでも楽しめそうな作品はいくつもあるんですよ。僕の中で、本格をまたやりたいな、っていう気持ちも強まってきているんですよ。五、六年くらい、出来るだけ本格から離れようとしてた面があるんですけど、もともと本格は好きなので、やりたくなくなってきたりするんですよ。それからデビュー十周年なので、編集者達が『ゴズミック』よ再び”みたいなことを言い始めるんですよ。昔は物議を醸したこともあって、ああいうのじゃない作品を、って言われることが多かったんですけど、去年くらいからは『ゴズミック』みたいなを書いてもらえませんか、って何回も言われてるんですよ。それで実際、書くつもりもありますし。

—— 他に流水さんの仕事として残っているのはJDCトリビュートですね。JDCという設定を使った作品をいろいろな作家に書いて貰うという企画ですが、参加したのは西尾(注19)さんと舞城(注20)さん、そして大塚(注21)さん。あと個人的には、『ちよつと探偵気分』(注22)も加えたところなんですけど、JDCっていうのはもともと、二次創作的なものを、受け入れやすい体質があったんでしょうか？

清涼院 いや、トリビュートというのは僕以前に誰でもできたと思うんですよ。あくまで例えですが、綾辻さんの館トリビュートとか、まあ有栖川さんの火村トリビュートとか、出来ないことはないと思うんですよ。でもやろうとした時に、嫌がるらしいんですよ。

—— 元を書いた作家がですか？
清涼院 そうです。でもJDCトリビュートやる時、編集者に、もしそういう企画があったら嫌ですか、って聞かれて僕は嫌じゃないです、と答えた

んですよ。西尾さん舞城さんと言わずに、誰かがJDCを書いてくれて、僕より面白い作品を書いてもらっても全然平気です、って言ったんですよ。それであの企画が実現したんですけど、普通はそう考えないらしいですよ。トリビュート作品に負けたら困る、みたいな発想があるみたいなんです。でも僕は負けてむしろ光栄みたいところがあるので。

—— それほどに面白い作品を引き出すきっかけになったのは僕だ、みたいな。

清涼院 そうですね。僕の設定で面白い作品が産まれるなら嬉しいっていう感じですよ。僕に拘りがなかったから、実現したんですよ。

—— ただ、プロの人達が華やかに作品を出す一方、一般参加に関しては、なんか、尻すぼみな感じがしたんですよ。

清涼院 あ、ご存じでしたか？ JDCオーデイションには作品が何十本も送られて来たんですよ。僕が審査してたら、何人もデビューできたはず

なんですが……実は僕は一切タッチしてないんです。

—— そうなんですか。

清涼院 僕は甘くて、人の長所を見るタイプなんですけど、選考をした僕の担当者(注23)は厳しい人だったんです。僕から見るとデビューさせてもいいのに、最終的に全部落としてしまったんですよ。僕としては、可能性がある人に声をかけて、才能を伸ばしてあげてから、デビューさせてもよかったと思ってるんです。当時忙しくて、あまり口出しできなかったというのもあるんですけど、悔やんでも悔やみきれないという感じですね。僕がもうちよつと口出しすれば、多分三、四人は絶対デビューしてたはずなので。

—— 実は僕も書いてたんですよ(笑)。木村彰一を主人公にして『キウ全日本謎解きレース』っていう小説を、JDC主催という設定で書いてましたね。それをオーディションに送ろうかって考えてたんですけど、理由があつてお蔵入りに……。あと、

『ファウスト』(注24)に書かれている「成功学キャラ教授」と、「ヤバ井でSHOW」と……あとは「イラストリック・シヤツフル 毎絵並絵」は今後も？

清涼院 あれは一応やると思います。

—— なぜ『ファウスト』には普通の物語を書かないのかなとか思うんですか。

清涼院 それは確信犯ですね。

—— やつぱり？

清涼院 『ファウスト』は僕の担当者である太田さんが始められたんですが、創刊準備前の、こんなのをやりたいつていうもやもやした段階から相談されてまして、雑誌作る時にも意見出してたんですよ。なので、『ファウスト』に関して僕は、裏方でいたいというのが一つあるんです。それから新世紀になって出てきた西尾さん、佐藤(注25)さん、舞城さんっていうのを売り出したくて、『ファウスト』を始めた面もあるんですよ。特に西尾さん舞城さんはJDCトリビュート作品を書いてくれてますし、佐藤さんも書きたいつて言ってるのを太田さんが

ダメだつて言つてた様なんですね。僕はお三方にもつと活躍してほしいし、もつとブレイクして、その三人の時代が来てほしかったんです。だから僕は表に出ず、裏方に回ろうと思ってるんですね。僕はほんとに『ファウスト』にガチの小説は書かないでおこうって決めてるんですよ。どうしてかと言うと、僕が本気で小説を書いたら、太田さんとしても誰を巻頭に置くとか、つまらないことで悩ましてしまふと思うんですよ。太田さんにそんな苦労はかけたくないですし、旧世代からいる僕が出ていくと、新世紀世代で盛り上がっているのにムードが変わっちゃう気がするので、書いてないんですよ。太田さんの方では僕に書いてくれて言ってくれているんですけど、ずっと拒み続けてます。

—— でもその反面、「成功学キャラ教授」では、流水さんの中で、コアな部分というか、いつも作品の中心あたりに込められているメッセージの部分素で出した感じがするんですけど。

清涼院 そうですね。だから裏技ではあるんですけど、「成功学キヤラ教授」の中で、僕の本質部分に近いことは実はやってるんですね。

注 15 四大悲劇

JDCが直面する日本で起きた四つの大事件群のこと。彩紋家殺人事件(『彩紋家事件』)、幻影城殺人事件(『ジョーカー』)、密室連続殺人事件(『ゴズミック』)の三つの事件が発表されているが、最後の悲劇である「双子連続消去」については伏線がいくつか張られているのみで未だに事件の全貌は現れていない。

注 16 「トップランド」シリーズ

二〇〇一年十月に『トップランド2001』、二〇〇二年四月に『トップランド1980』を発表。

以降は毎年十月に現代編(2002、2003……)、毎年四月に過去編(1981、1982……)というように限りなく続けていくのが初期のシリーズ構想だったが、『トップランド2002』にて突然のシリーズ終結宣言がなされ、ファンは大混乱に陥った。その後、『トップラン&ランド完』にて『トップランド』から始まる全ての物語に幕が下ろされた。

注 17 ××

ネタバレにつき伏せ字。それ程難しくないで、流水作品を全て読めば意味はわかるはずである。

注 18 文SHOW

行末を揃えたり斜めにしたりなどと、文章の見た目に拘りつた流水大説のスタイル。

『トップランド2002』の巻末付録にその詳細が余すところ無く書かれている。

注 19 西尾

『クビキリサイクル』で第23回メフィスト賞を受賞した西尾維新のこと。大人気の「戯言」シリーズが最近完結した。

注 20 舞城

『煙か土か食い物』で第19回メフィスト賞を受賞した舞城王太郎。『阿修羅ガール』で第16回三島由紀夫賞を受賞。

注21 大塚

『MADARA』や『多重人格探偵サイコ』の原作で知られる大塚英志のこと。箸井地図が絵を担当している『探偵儀式』はそれらの作品とは異なり、完結することを望む。

注24 『ファウスト』

前述の太田克史氏が創刊した雑誌。一人編集体勢をとる、フォントへの異常な拘り、イラストと物語を融合したイラストリー等、雑誌としては前代未聞の話題になった。

注22 『ちよつと探偵気分』

『風のシルフィード』『蒼き神話マルス』『空の昴』などで有名な本島幸久が描いた漫画。探偵への愛を存分に出した作品で、その中でJDCが重要な役割を果たしている。

注25 佐藤

『フリッカー式』で第19回メフィスト賞を受賞した佐藤友哉のこと。文学フリマで会った時、「好きな言葉はなんですか」という質問に「夢と希望……違うか」と答えていた。

作者は競馬漫画の章題に「匣の中の失楽」や「双頭の悪魔」を使う程のミステリ好き。

注23 僕の担当者

「メフィスト」の巻末座談会ではJとして知られる太田克史氏のこと。流水作品ではストロング・J・太田として登場。最近、講談社ノベルスを出している文三から海外文芸出版部に移動した。

GOD SHOW
不^ぶ乱^{らん}で^です^す S H O W^来

—— 以上でデビュー十年間の総括として、次はこれからの方向性について聞きたいと思います。今までの十年に対して、これからの十年はどうなっていくのでしょうか。

清涼院 だいぶ次の十年は面白くなる、という気がします。最初の十年は模索に明け暮れてたんですよ。その結果、解ったことがたくさんあるんですね。それをまだ全然実行出来てない段階なんです。だから、これからの十年は最初の十年で模索したことを、どんどん実行していく時期ですね。それはゆうに十年くらいかかる、と思います。だから次の十年間について、僕は全く心配していませんよ。むしろ、さらに次の十年はまた模索しないといけないので大丈夫かな、と……どこまで先を見てるんだって感じですけど(笑)

—— (S) それは作品の構想も？

清涼院 構想もですが、これから自分がやっていくべき方向性ですね。最初の十年は全てが模索なんです。こう書けばこういう反応が帰ってくるのかも全然分からなかったですし。でもそのおかげで、溜め込んでるものはたくさんあるので、それを発揮する十年になると思いますね。

—— 聞いておきたいのは、その十年で本格に近い作品を書くかどうかなんです。

清涼院 寄りの作品は書くでしょうね。そう、僕は本格について一つ言いたいことがあるんです。『ゴズミック』にしろ『ジョーカー』にしろ、本格じゃないとは思いません。狭義で言ったら、絶対に本格じゃないんですけど、本格のテイストを、何十パーセントか取り入れてると思うんですよ。ただ『ゴズミック』や『ジョーカー』が出版された時に、それをほとんどの人、特に本格の人に理解してもらえなかったんですね。あそこで本格の人に、本格の新たな可能性とか言われてたら、きっと僕は本格ばかり書いていた

んですよ。だからそうならなかったことに感謝してるし、残念でもあるんですね。だからそれを踏まえた上で、また本格寄りの作品を書くと思います。

—— 僕は『カーニバル』のトリックですら本格としてありだと思いませんけど。

清涼院 それは凄いいんです。そんな人が本格サイドに多くいたら、本格ばかり書くのが自分でも目に見えるんですよ。でも一生懸命知恵を絞って、本格の何十パーセントかを抑えつつ、新たな挑戦をした作品に対して、単に狭い本格の純粋な物差しで違うとしか言われなかったんですね。それなら僕は別のことやりますとしか、言えなかったんです。でも最近はずっとやり方があるかな、という感じがするんですよ。だから毎回ではないですが、本格寄りの作品も書いていこうと思います。

—— さっき聞くのを忘れてたんですが、『トプラン』にしろ、『カーニバル』にしろ、『とくまでやる』にしろ、

真相や背景を関係者の方から、主人公側に伝えられる形式が多いと思うんですけど。

清涼院 あれは、何でかというところ、本格の放棄の宣言なんですよ。

—— 主人公の側で謎を解くんじゃなくて、いわゆる犯人側から与えられる解決、という感じですね。

清涼院 分かってもええないかもしれないんですが、本格の人が何を本格とするのかはミス研などでさんざん議論してきたので、僕も死ぬほど知ってるんです。でも、その上で僕は本格から外してるんですよ。だから『トップラン』とかの様に解決編で、真相を伝えられるというのは、僕なりの放棄なんですよね。主人公達が手掛かりを集めて、解いていく形にすることは可能ですけど、それをやると、僕が単に本格を書いているだけになってしまいますし、僕が本格から離れて自分なりの作品を書こうというのと、矛盾するんですよ。だから僕が本格を書く時は、きちんと解いていく形になると思います。だから、僕の

作品の中で一番本格っぽいと言われるのは『みすてりあるキャラねっと』なんです。編集部から、若い子向けの本格お願いますと言われて、自分なりに本格として書いたんですよ。あとは「木村間の犯罪×Ⅱ」とか、『カーニバル』のロンリー・クイーンが主人公の短編とか、シベリア鉄道の事件は、僕が本格を書こうと思って書いた数少ない例なんです。シベリア鉄道の事件は、本格の読者からも絶賛だったんですよ。だから僕が本格を書こうと思った時は高い評価を得てるんですね。こう書けば納得してもらえるところを僕は確認しているだけなんです。それを長編でやることも可能ですが、ある程度待望論がないと嫌なんです。僕としては、本格寄りの作品を書いて、挑戦やスピリットを本格の人が理解してくれたら、本当の本格ミステリに挑む日が来るかもしれないです。でも、その段取りがないと絶対ありえないですね。

—— それはどうしても読んでみ

たいんですけどね。

清涼院 僕が百%本格じゃなくて、七十%の本格を出す時が近い将来、来ると思っています。そこで本格の人が、やっぱり清涼院は本格ティストあるんだって言うてくれたら頑張ると思うんですよ。でも多分、本格じゃないって言われるので、そうするとやっぱり本格やめたいなあ、となると思いますけどね。

—— (S) 自分の立ち位置で作品を評価する人達がいて、そういう人達から見ると、流水さんの作品は叩かれる運命にあると思うんですが、それはどう思いますか？

清涼院 それは仕方がないと思います。僕は根っこでは本格が好きなんです。でも本格を守っている顔をしている人達が好きではないとか。これは本格内部でも言っている人はいるんですけど、もう少し本格は柔軟になってもいい気がするんですよ。西尾さん、佐藤さんや舞城さんの様に本格ティスト作品を書く作家が出て、も、“脱格・脱本格”だとなるじゃない

いですか。でもそれらの作品も本格の中にいるとした方が、本格にとつていいと思うんですよ。勝手な思いなんですけど、どんどん閉じている気がするので、ジャンルを考えたなら良くない気がしますね。

—— 去年の『容疑者Xの献身』に関する「本格・非本格」論争も排他的な感じが。

清涼院 排他的になつていくと、ジャンルにとつても良くないと思いますし、あとは前例がある無いうんぬんでも、凄いな神経使うじゃないですか。あら探してみたいになっちゃうと、ジャンルとして発展しないので、もう少し広い度量を期待したいですね。

—— それでは、今後の出版予定などをお聞きしても？

清涼院 今年の九月から来年の八月までを十周年の年度と勝手に定義してるんですよ。その間に四つの出版社から十周年記念作品を出す予定なんですけど、ご存じですか？

—— はい。『活字倶楽部』で。

清涼院 見てましたか。積み残した仕

事として『成功学キアラ教授』があるんですが、それはできあがってるんですよ。でも出版社の都合で年末くらいまで出版されないんですね。だから出るのは十周年の年度に入るんですけど、十周年記念作品ではないんですよ。だから『成功学キアラ教授』以外に、角川、講談社、幻冬舎、徳間からそれぞれ十周年記念作品を出します。近い予定として、角川書店から九月末に長編書き下ろしを出す予定がありますね。

—— ということは、もうそろそろ原稿も？

清涼院 かなり厳しいんですよ。最初は十月末の予定だったんですが、他社とぶつかるので、九月末にしてみたらえませんかと言われてるんですよ。締切を一ヶ月前倒したので、間に合うか微妙なんですね。無理だったら十月になると思います。

—— それはもう、かつて予告だけされた『？？？』とは全くの別の？

清涼院 全然違いますよ。それもかなり新しい内容です。うまくいけばこの

インタビューが載る頃には出版されるかもしれないですね。

—— 「Ans.」は十月上旬に出る予定ですか。

清涼院 角川以外の出版社は言えないんですが、十月と十一月と、一月と四月にも、本が出る予定は入ってます。さらにプラスアルファで、何冊か抱えてるんですよ。

—— え、そんなに。

—— かなりハードですね。(S)
清涼院 実は『成功学キアラ教授』の他にもう一冊、秘密の計画については、既に出来上がってるんですよ。

—— 数年越しの秘密プロジェクトのことですか？

清涼院 そうです、それです。僕、『活字倶楽部』で、何年か前から最強の極秘プロジェクトがあると云ってるんですよ。うまくいけばそれが年内に出ます。だから今年の秋以降は、次々出していかないといけないんですけどね。

—— それから今後の出版とは関

係なく、次のJDCというか、双子連続消去に関しては、いずれ？

清涼院 本当はとっくに出してははずだったんです。これも手違いがありまして。これは、言っちゃうとまずいかもしれないんですけどね。

—— オフレコでも構いません。

清涼院 この部分はカットしてもいいかもしれないですけど……

↳ SHOW略↳

清涼院 だから『彩紋家事件』出してからすぐ双子連続消去を出すつもりで準備もしてたんですけどね。

—— もう書くことについては決まってるじゃない？

清涼院 内容、全部決まってますよ。十周年の記念作品としてやってもらえませんか？という話もあったんですけど、十周年は違う作品がいいだろうと思いますので。

—— じゃあJDCに関しては、四大悲劇で……？

清涼院 終わりです。JDCは書きた

びにかなり消耗するんですよ。毎回、二度とごめんだと思ってるんですけどね。

—— そういえば、JDCをイメージすると、どうしても二十一世紀のイメージが湧いてこないんですよ。

清涼院 世紀末的ですからね。

—— では、そろそろまとめに入りますが、「常に最新作がベスト」という姿勢は、今後もそのまま？

清涼院 それは全然変わらないです。僕自身、ベストと思っけないと書けないです。だけど、ちょっと難しいのは、最近同時進行で書いてたりするんですよ。そういう時は、どれが最新作でベストになるんだろうっていう（笑） どれもベストのつもりなんですけど、自分の中にも矛盾はあるのかなと思ったりします。気分的には、その時に取り組んでるのが、絶対にベストですよ。

—— 流水さんに対し、いち読者として、「常に最新作に期待」という姿勢でいたいと思います。本日は筑波大学ミステリー研究会のインタ

ビューに答えて頂き、本当にありがとうございます。ありがとうございました。

こうして、十周年記念企画である清涼院流水 in 禁忌は幕を下ろした。

涼しい笑顔がとても記憶に残る清涼院さんの話しぶりに口下手な僕達も流れるように多くの質問ができ、洪水の様に感動が押し寄せています。さて、十周年に関わることをたくさん聞こうと思っていた筈なのに、広くあさい質問だった気もします。やはり、どうしても、清涼院流水氏の方がインタビュー慣れてしているため、とてもわかりやすいお答えの連続にうならされてしまいました。今後もご無理をなさらずに、前代未聞かつざんしんな大説を読ませて下さい。いちおう巻末に大説リストを掲載しました。それをご覧下されば幸いです。

清涼院流水 in 禁忌 Fin.

W H O R O C K 無限大 S E T リスト

[十周年企画]

- 1 『コズミック 世紀末探偵神話』講談社ノベルス
- 2 『ジョーカー 旧約探偵神話』講談社ノベルス
- 3 『19 ボックス 新みすてり創世記』講談社ノベルス
- 4 『カーニバル・イヴ 人類最大の事件』講談社ノベルス
- 5 『エル 全日本じゃんけんトーナメント』幻冬舎ノベルス
- 6 『カーニバル 人類最後の事件』講談社ノベルス
- 7 『カーニバル・デイ 新人類の記念日』講談社ノベルス
- 8 『全日本じゃんけんトーナメント』幻冬舎文庫
- 9 『ユウ 日本国民全員参加テレビ企画』幻冬舎ノベルス
- 10 『コズミック 流』講談社文庫
- 11 『ジョーカー 清』講談社文庫
- 12 『トップラン1 ここが最前線』幻冬舎文庫
- 13 『ジョーカー 涼』講談社文庫
- 14 『コズミック 水』講談社文庫
- 15 『トップラン2 恋人は誘拐犯』幻冬舎文庫
- 16 『トップラン3 身代金ローン』幻冬舎文庫
- 17 『トップラン4 クイズ大逆転』幻冬舎文庫
- 18 『トップラン5 最終話に専念』幻冬舎文庫
- 19 『トップラン6 大航海をラン』幻冬舎文庫
- 20 『秘密屋 赤』講談社ノベルス
- 21 『秘密屋 白』講談社ノベルス
- 22 『Wドライブ 院』講談社文庫
- 23 『トップランド 2001 天使エピソード1』幻冬舎文庫
- 24 『トップランド 1980 紳士エピソード1』幻冬舎文庫
- 25 『トップランド 2002 戦士エピソード1』幻冬舎文庫
- 26 『みすてりあるキャラねっと』角川スニーカー文庫
- 27 『秘密室ボン』講談社ノベルス
- 28 『カーニバル 一輪の花』講談社文庫
- 29 『カーニバル 二輪の草』講談社文庫
- 30 『カーニバル 三輪の層』講談社文庫
- 31 『カーニバル 四輪の牛』講談社文庫
- 32 『カーニバル 五輪の書』講談社文庫
- 33 『億千万の人間CMスキャンダル』幻冬舎文庫
- 34 『彩紋家事件 極上マジックサーカス』講談社ノベルス
- 35 『彩紋家事件 下克上マスターピース』講談社ノベルス
- 36 『キャラねっと 愛\$探偵の事件簿』角川書店
- 37 『トップラン&ランド完』幻冬舎文庫
- 38 『秘密屋文庫 知ってる怪』講談社文庫
- 39 『とくまでやる』徳間デュアル文庫
- 40 『とくまつ 夜霧邸事件』徳間デュアル文庫
- 41 『ぶらんでいっしゅ?』幻冬舎
- 42 『とく。(とくまる)』徳間デュアル文庫
- 43 『秘密室ボン QUIZ SHOW』講談社文庫
- 44 『成功学キャラ教授』講談社BOX

- 45 『パーフェクト・ワールド』 What a perfect world!
 Book.1 One Ace (ひとりのエース)』講談社BOOK
- 46 『パーフェクト・ワールド』 What a perfect world!
 Book.2 Two to Tango (タンゴを踊る二人)』講談社BOOK
- 47 『パーフェクト・ワールド』 What a perfect world!
 Book.3 Three Cheers (万歳三唱)』講談社BOOK
- 48 『パーフェクト・ワールド』 What a perfect world!
 Book.4 Four Winds (四方八方)』講談社BOOK
- 49 『キャラねっと完全版 愛\$探偵ノベル』角川文庫
- 50 『LOVE LOOIC(蜜と罰)』角川書店
- 51 『パーフェクト・ワールド』 What a perfect world!
 Book.5 Five-star (五つ星 超一流)』講談社BOOK
- 52 『パーフェクト・ワールド』 What a perfect world!
 Book.6 Sixth Sense (第六感)』講談社BOOK
- 53 『パーフェクト・ワールド』 What a perfect world!
 Book.7 Seventh Heaven (最上の天国)』講談社BOOK
- 54 『パーフェクト・ワールド』 What a perfect world!
 Book.8 Figure of Eight (∞の字の形)』講談社BOOK
- 55 『パーフェクト・ワールド』 What a perfect world!
 Book.9 On the Cloud Nine(雲の上の心地)』講談社BOOK
- 56 『パーフェクト・ワールド』 What a perfect world!
 Book.10 Ten Commandments (十戒)』講談社BOOK
- 57 『パーフェクト・ワールド』 What a perfect world!
 Book.11 Ekeven-plus (選抜試験)』講談社BOOK
- 58 『パーフェクト・ワールド』 What a perfect world!
 Book.12 Perfect Twelve (完全な12)』講談社BOOK
- 59 『彩紋家事件Ⅰ 奇術が来りて幕を開く』講談社文庫
- 60 『彩紋家事件Ⅱ 白と夜』講談社文庫
- 61 『彩紋家事件Ⅲ 彩紋家の一族』講談社文庫
- ？ 『神とオセロ SF MYSTERY TALK MORE』徳間書店
- ？ 『ゴズミック・ゼロ 日本絶滅計画』文藝春秋
- ？ 『完全犯罪研究会』？？？
- ～ RE名義 (飯野賢治との合作) ～
- 『レッドブック ワルツの雨』
- ～ 未収録 (予定) 短編&連載リスト～
- 「One more death 読者探偵デス」(メフィスト97年9月号)
- 「Face ～ II ～ Phase 読者探偵ピース」(メフィスト97年12月号)
- 「ミレニアム・トリックス」(文藝別冊Jミステリー)
- 「JDCじゃんけんトーナメント」(本格ミステリーは探偵で読め！)
- 「彩紋家受験 JDCエピソード松」(絶対ミステリーが好き！)
- 「必殺者M」(ミステリー迷宮読本)
- 「読んだモン勝ちキャラねっと」(ザ・スニーカー04年4月号)
- 「山風忍法超」(パンドラ Vol.1 side-A)
- 「ヤバ井でSHOW」(ファウスト連載中)
- 「イラストリック・シャツフル 毎絵並絵」(ファウスト連載中)
- 「本人日記」(ho-nin 連載中)

～ 原作作品リスト ～

絵・蓮見桃衣

- 『エキストラ・ジョーカー JOE』あすかコミックDX
『エキストラ・ジョーカー KER』あすかコミックDX
『ゴズミック・コミックス AND』あすかコミックDX
『ゴズミック・コミックス END』あすかコミックDX

～ 原案作品リスト ～

原作・大塚英志、絵・箸井地図

- 『探偵儀式Ⅰ』角川コミックエース
『探偵儀式Ⅱ』角川コミックエース
『探偵儀式Ⅲ』角川コミックエース
『探偵儀式Ⅳ』角川コミックエース
『探偵儀式Ⅴ』角川コミックエース

～ 推薦文 ～

大塚英志『多重人格探偵サイコ 雨宮一彦の帰還』講談社ノベルス
西尾維新『クビキリサイクル』講談社ノベルス

～ 解説 ～

田中芳樹『銀河英雄伝説外伝 螺旋迷宮・下』徳間デュアル文庫
森博嗣『θは遊んでくれたよ』講談社文庫

～ JDCトリビュート作品リスト ～

西尾維新『ダブルダウン勘繰郎』講談社ノベルス
西尾維新『トリプルプレイ助悪郎』講談社ノベルス
舞城王太郎『九十九十九』講談社ノベルス
本島幸久『ちよつと探偵気分』少年マガジンコミック

このリストは二〇〇八年五月末の情報をもとに作られています。一部、インタビュー内容と異なる部分がありますが、ご了承ください。

なお、無限大SEIリスト作成の際には「セカイイサン」(<http://homepage3.nifty.com/m-sheryisan/jc.html>)の著作リスト及び雑誌掲載リストを参考にさせて頂きました。この場を借りてお礼を申し上げます。

本文仕様書体

漢字：MSP 明朝

かな：MSP 明朝

英文：Century

数字：Century

題字：HG正楷書体-PRO

副題：DF平成ゴシック体W5

目次：HG正楷書体-PRO

章題：HG正楷書体-PRO